中国怪奇小説集
白猿伝・其他

岡本綺堂

第五の男は語る。

「唯今は『酉陽雑俎』と『宣室志』のお話がありました。そこで、わたくしには其の拾遺（しゅうい）といったような意味で、唐代の怪談総まくりのようなものを話せという御注文ですが、これはなかなか大変でございます。とても短い時間に出来ることではありません。勿論、著名の物を少々ばかり紹介いたすに過ぎないと御承知ください。就きましては、まず『白猿伝』を申し上げます。この作者の名は伝わって居りません。唐に欧陽詢（おうようじゅん）という大学者がありまして、後に渤海男（ぼっかいだん）に封（ほう）ぜられましたが、この人の顔が猿に似ているというの

で、或る人がいたずらにこんな伝奇を創作したのであって、本当に有った事ではないという説があります。しかし〈志怪の書〉について、その事実の有無を論議するのは、無用の弁に近いかとも思われます。ともかくも古来有名な物になって居りまして、かの頼光(らいこう)の大江山(おおえやま)入りなども恐らくこれが粉本(ふんぽん)であろうと思われますから、事実の有無(うむ)を問わず、ここに紹介することに致します。

そのほかには、原化記(げんかき)、朝野僉載(ちょうやせんさい)、博異記(はくいき)、伝奇、広異記(こういき)、幻異志(げんいし)などから、面白そうな話を選んで申し上げたいと存じます。これらもみな有名の著作であり

まして、一つ一つ独立して紹介するの価値があるのでございますが、あとがつかえて居りますから、そのなかで特色のあるお話を幾つか拾い出すにとどめて置きます。右あらかじめお含み置きください」

白猿伝

梁（六朝）の大同の末年、平南将軍藺欽をつかわして南方を征討せしめた。その軍は桂林に至って、李師古と陳徹を撃破した。別将の欧陽紇は各地を攻略して長楽に至り、ことごとく諸洞の敵をたいらげて、

深く険阻の地に入り込んだ。
　欧陽紇の妻は白面細腰、世に優れたる美人であったので、部下の者は彼に注意した。
「将軍はなぜ麗人を同道して、こんな蓄地へ踏み込んでお出でになったのです。ここらの山の神は若い女をぬすむといいます。殊に美しい人はあぶのうございますから、よく気をお付けにならなければいけません」
　紇はそれを聞いて甚だ不安になった。夜は兵をあつめて宿舎の周囲を守らせ、妻を室内に深く閉じ籠めて、下婢十余人を付き添わせて置くと、その夜は暗い風が吹いた。五更（午前三時―五時）に至るまで寂然とし

て物音もきこえないので、守る者も油断して仮寝（うたたね）をしていると、たちまち何物かはいって来たらしいので驚いて眼をさますと、将軍の妻はすでに行くえ不明であった。扉（とびら）はすべて閉じたままで、どこから出入りしたか判らない。門の外は嶮（けわ）しい峰つづきで、眼さきも見えない闇夜にはどこへ追ってゆくすべもない。夜が明けても、そこらになんの手がかりも見いだされなかった。

　紇の痛憤はいうまでもない。彼はこのままむなしく還（かえ）らないと決心して、病いと称してここに軍を駐（とど）め、毎日四方を駈けめぐって険阻の奥まで探り明かした。

こうしてひと月あまりを経たるのち、百里（六丁一里）ほどを隔てた竹藪で妻の繡履（ぬいぐつ）の片足を見付け出した。雨に湿（ぬ）れ朽ちてはいたが、確かにそれと認められたので、紇はいよいよ悲しみ怒って、そのゆくえ捜索の決心をますます固めた。

彼は三十人の壮士をすぐって、武器をたずさえ、糧食を背負い、巌窟（がんくつ）に寝（い）ね、野原で食事をして、十日あまりも進むうちに、宿舎を去ること二百里、南のかたに一つの山を認めた。山は青く秀（ひい）でて、その下には深い渓（たに）をめぐらしていた。一行は木を編んで、嶮しい巌や翠（あお）い竹のあいだを渡り越えると、時に紅い衣（きもの）が見

えたり、笑い声がきこえたりした。

蔦（つた）かずらを攀（よ）じて登り着くと、そこには良い樹を植えならべて、そのあいだには名花も咲いている。緑の草がやわらかに伸びて、さながら毛氈（もうせん）を敷いたようにも見える。あたりは清く静けく、一種の別天地である。

路を東にとって石門にむかうと、婦女数十人、いずれも鮮麗の衣服を着て歌いたわむれていたが、紇の一行を見てみな躊躇するようにたたずんでいた。やがて近づくと、かれらは一行にむかって、なにしに来たかと訊（き）いた。紇は事情をつまびらかに打ち明けると、女たちは顔をみあわせて嘆息した。

「あなたの奥さんはひと月ほど前からここに来ておいでですが、今は病気で寝ておられます。来てごらんなさい」

門をはいると、木の扉がある。内は寛(ひろ)くて、座敷のようなものが三、四室ある。壁に沿うて床(とこ)を設け、その床は綿に包まれている。紇の妻は石の榻(とう)の上に寝ていたが、畳をかさね、茵(しとね)をかさねて、結構な食物がたくさんに列べてあった。たがいに眼を見合わせると、妻は急に手を振って、夫に早く立ち去れという意を示した。

女たちは言った。

「奥さんはこの頃お出でですが、わたし達の中にはもう十年もここにいる者があります。ここは神霊ある物の棲む所で、自由に人を殺す力を持っています。百人の精兵でも、かれを取り押えることは出来ません。幸いに今は留守ですから、還らない間に早く立ち去るが好うございます。しかし美(い)い酒二石と、食用の犬十匹と、麻数十斤(きん)とを持ってお出でになれば、みんなが一致して彼を殺すことが出来ます。来るならば必ず正午ごろに来てください。それも直ぐに来てはなりません。十日を過ぎてお出でなさい」

それでは十日の後に再び来ると約束して、紇の一行

は立ち帰った。それから美酒と犬と麻とを用意して、約束の時刻にたずねて行くと、女たちは待っていた。

「かれは酒が大好きで、酔うと力が満ちて来ると見えて、私たちに言いつけて綵糸（いろいと）で自分のからだを牀（ゆか）に縛り付けさせます。そうして、一つ跳（は）ねあがると、糸は切れてしまうのです。しかし三本の糸をまき付けると、力が不足で切ることが出来ません。それですから、帛（きぬ）のなかに麻を隠して置いて縛ったらば、おそらく切ることは出来まいと思われます。彼のからだはすべて鉄のようで刃物などは透りませんが、ただ臍（へそ）のした五、六寸のところを大事そうに隠していますから、そこが

きっと急所で、刃物を防ぐことが出来ないのであろうと察せられます」
　女たちは更にかたわらの巌室（いわむろ）を指さして教えた。
「そこは食物庫（ぐら）ですから暫く忍んでおいでなさい。酒を花の下に置き、犬を林のなかに放して置いて、わたし達の計略が成就（じょうじゅ）した時に、あなた方に合図をします」
　その通りにして、一行は息を忍ばせて待っていると、日も早や申（さる）の刻（午後三時―五時）とおぼしき頃に、練絹（ねりぎぬ）のような物があなたの山から飛ぶが如くに走って来て、たちまちに洞（ほら）のなかにはいった。見れば、身の

たけ六尺余の男で、美しい髯(ひげ)をたくわえ、白衣を着て杖を曳いていた。かれは女たち大勢に取り巻かれて庭に出たが、たちまちに犬を見つけて驚き喜び、身を跳らせて引っ捕えたかと思うと、引き裂いて片端から啖(くら)い尽くした。女たちは玉の杯で酒をすすめると、機嫌よく笑い興じながらかれは数斗(と)の酒を飲んだ。

女たちはかれを扶(たす)けて奥にはいったが、そこでも又笑い楽しむ声がきこえた。やや暫くして、女が出て来て紈の一行を招いたので、すぐに武器をたずさえて踏み込むと、一頭の大きい白猿が四足(しそく)を牀(ゆか)にくくられていて、一行を見るや慌て騒いで、しきりに身をもがい

ても動くことが出来ず、いたずらに電光のような眼を輝かすばかりであった。一行は先を争って刃を突き立てたが、あたかも鉄石の如くである。しかも臍の下を刺すと、刃（やいば）は深く突き透って、そそぐが如くに血が流れた。

「ああ、天がおれを殺すのだ」と、かれは大きい溜め息をついた。「貴様たちの働きではない。しかし貴様の女房はもう孕（はら）んでいる。必ずその子を殺すな。明天子に逢って家を興すに相違ないぞ」

言い終って彼は死んだ。その庫（くら）をさがすと、宝物珍品が山のように積まれていて、およそ人世の珍とする

物は備わらざるなしという有様であった。名香数斛、宝剣一雙、婦女三十人、その婦女はみな絶世の美女で、久しいものは十年もとどまっている。容色おとろえた者はどこへか連れて行かれて、どうなってしまうか判らない。女を取り、物を取るのはすべて自分ひとりで、他に党類はない。朝はたらいで顔を洗い、帽をかぶり、白衣を着るが、寒さ暑さに頓着せず、全身は長さ幾寸の白い毛に蔽われている。

かれが家にある時は、常に木彫りの書物を読んでいるが、その文字は符篆の如くで、誰にも読むことは出来ない。晴れた日には両手に剣を舞わすが、その光り

は身をめぐって飛び、あたかも円月の如くである。飲み食いは時を定めず、好んで木実（このみ）や栗を食うが、もっとも犬をたしなみ、啖い殺して血を吸うのである。午（ひる）を過ぎると飄然として去り、半日に数千里を往復して夕刻には必ず帰って来る。夜は婦女にたわむれて暁に至り、かつて眠ったことがない。要するに猳※（かかく）［＃「けものへん＋矍」、133-13］のたぐいである。

ことしの秋、木の葉が落ち始める頃に、かれはさびしそうに言った。

「おれは山の神に訴えられて、死罪になりそうだ。しかし救いをもろもろの霊ある物に求めたから、どうに

か免（まぬ）かれるだろう」

　前月、書物を収めてある石橋が火を発して、その木簡（もっかん）を焼いてしまった。かれは書物を石の下に置いたのである。かれは悵然（ちょうぜん）としてまた言った。

「おれは千歳（せんざい）にして子がなかったが、今や初めて子を儲けた。おれの死期もいよいよ至った」

　かれはまた、女たちを見まわして、涙を催しながら言った。

「この山は険阻で、かつて人の踏み込んだことのない所だ。上は高くして樵夫（きこり）なども見えず、下は深うして虎狼（ころう）怪獣が多い。ここへもし来る者があれば、それは

天の導きというものだ」

　怪物の話はこれで終った。紇はその宝玉や珍品や婦女らを連れて帰ったが、婦女のうちには我が家を知っていて、無事に戻る者もあった。紇の妻は一年の後に男の子を生んだが、その容貌は父に肖（に）ていた。

　紇は後に陳（ちん）の武帝（ぶてい）のために誅せられたが、彼は平素から江総（こうそう）と仲がよかった。江総は紇の子の聡明なるを愛して、常に自分の家に留めて置いたので、紇のほろびる時にもその子は難をまぬかれた。生長の後、その子は果たして文学に達し、書を善くし、名声を一代に知られた。

（白猿伝）

女俠

唐の貞元年中、博陵（はくりょう）の崔慎思（さいしんし）が進士（しんし）に挙げられて上京したが、京に然るべき第宅（ていたく）がないので、他人の別室を借りていた。家主は別の母屋（おもや）に住んでいたが、男らしい者は一人も見えず、三十ぐらいの容貌（きりょう）のよい女と唯ふたりの女中がいるばかりであった。崔は自分の意を通じて、その女を妻にしたいと申し入れると、彼女は答えた。

「わたくしは人に仕えることの出来る者ではありません。あなたとは不釣合いです。なまじいに結婚して後日(ごじつ)の恨みを残すような事があってはなりません」
それでは妾(めかけ)になってくれと言うと、女は承知した。しかも彼女は自分の姓を名乗らなかった。そうして二年あまりも一緒に暮らすうちに、ひとりの子を儲けた。それから数月の後、ある夜のことである。崔は戸を閉じ、帷(とばり)を垂れて寝(しん)に就くと、夜なかに女の姿が見えなくなった。

崔はおどろいて、さては他に姦夫(かんぷ)があるのかと、憤怒(いきどおり)に堪えぬままに起き出でて室外をさまよってい

る時、おぼろの月のひかりに照らされて、彼女は屋上から飛び降りて来た。白の練絹を身にまとって、右の手には、匕首（あいくち）、左の手には一人の首をたずさえているのである。

「わたくしの父は罪なくして郡守に殺されました。その仇を報ずるために、城中に入り込んで数年を送りましたが、今や本意を遂げました。ここに長居は出来ません。もうお暇（いとま）をいたします」

彼女は身支度して、かの首をふくろに収め、それを小脇にかかえて言った。

「わたくしは二年間あなたのお世話になりまして、幸

いに一人の子を儲けました。この住居も二人の奉公人もすべてあなたに差し上げますから、どうぞ子供の養育を願います」

男に別れて墻（かき）を越え、家を越えて立ち去ったので、崖も暫くはただ驚嘆するのみであった。やがて女はまた引っ返して来た。

「子供に乳をやって行くのを忘れましたから、ちょっと飲ませて来ます」

彼女は室内にはいったが、やや暫くして出て来た。

「乳をたんと飲ませました」

言い捨てて出たままで、彼女はかさねて帰らなかっ

た。それから時を移しても、赤児（あかご）の啼く声がちっとも聞えないので、崔は怪しんでうかがうと、赤児もまた殺されていた。

その子を殺したのは、のちの思いの種を断つためであろう。昔の侠客もこれには及ばない。

（原化記）

霊鏡

唐の貞元年中、漁師十余人が数艘（そう）の船に小網を載せて漁に出た。蘇州（そしゅう）の太湖が松江（しょうこう）に入るところである。

網をおろしたがちっとも獲物（えもの）はなかった。やがて網にかかったのは一つの鏡で、しかもさのみに大きい物でもないので、漁師はいまいましがって水に投げ込んだ。それから場所をかえて再び網をおろすと、又もやかの鏡がかかったので、漁師らもさすがに不思議に思って、それを取り上げてよく視ると、鏡はわずかに七、八寸であるが、それに照らすと人の筋骨（きんこつ）から臓腑（ぞうふ）まではっきりと映ったので、最初に見た者はおどろいて気絶した。

ほかの者も怪しんで鏡にむかうと、皆その通りであるので、驚いて倒れる者もあり、嘔吐（はきけ）を催す者もあっ

た。最後の一人は恐れて我が姿を照らさず、その鏡を取って再び水中に投げ込んでしまった。彼は倒れている人びとを介抱して我が家へ帰ったが、あれは確かに妖怪であろうと言い合った。

あくる日もつづいて漁に出ると、きょうは網に入る魚が平日の幾倍であった。漁師のうちで平生から持病のある者もみな全快した。故老の話によると、その鏡は河や湖水のうちに在って、数百年に一度あらわれるもので、これまでにも見た者がある。しかもそれが何の精であるかを知らないという。

（同上）

仏像

白鉄余(はくてつよ)は延州(えんしゅう)の胡人(こじん)(西域(せいいき)の人)である。彼は邪道をもって諸人を惑わしていたが、深山の柏の樹の下に銅(あかがね)の仏像を埋め、その後数年、そこに草が生えたのを見すまして、土地の人びとを欺(あざむ)いた。

「昨夜わたしが山の下を通ると、仏のひかりを見た。日をさだめて精進潔斎(しょうじんけっさい)をして、尊い御仏(みほとけ)を迎えることにしたい」

定めの日に数百人をあつめて、ここらという所を掘

りかえしたが、仏は見付からなかった。彼はまた言った。

「諸人が誠心をささげて布施物(ふせもつ)を供えなければ、仏の姿を拝むことは出来ない」

集まっている男女はあらそって百余万銭を供えると、彼はさきに埋めたところを掘り起して、一体の仏像を示した。その噂が四方に伝わって、それを拝ませてくれという者が多くなると、彼はまた宣言した。

「尊い御仏を拝むと、万病が本復(ほんぷく)する」

その計略成就して、数百里のあいだの老若男女(ろうにゃくなんにょ)がみな集まった。そこで、紫や緋(ひ)や黄の綾絹(あやぎぬ)をもって幾

重にも仏像をつつみ、拝む者があれば先ずその一重を剝（は）いで見せる。一回の布施が十万銭、その正体を拝むまでには幾十万銭に及ぶのであった。

こんな詭計（きけい）を用いているうちに、一、二年の後には土地の者がみな彼に帰伏した。彼は遂に乱をおこして、みずから光王（こうおう）と称し、もろもろの官職を設け、長吏（ちょうり）を置き、諸国の禍いをなすこと数年に及んだので、朝廷は将軍程務挺（ていむてい）に命じてこれを討たしめ、かれらをほろぼして光王を斬った。

（朝野僉載）

孝子

東海に郭純（かくじゅん）という孝子があった。母を喪（うしな）って彼は大いに哭（こく）した。その哭するごとに、鳥の群れがたくさん集まって来るのである。官から使者を派して取調べさせると、果たしてその通りであったので、彼は孝子として村の入口に表彰された。

後に聞くと、この孝子は哭するごとに、地上に餅を撒（ま）き散らして鳥にあたえた。それが幾たびも続いたので、その泣き声を聞きつけると、鳥の群れは餅を拾うために集まって来たのであった。

（同上）

壁龍

柴紹（さいしょう）の弟なにがしは身も軽く、足も捷（はや）く、どんな所へでも身を躍らせてのぼるばかりか、十余歩ぐらいは飛んで行った。

唐の太宗（たいそう）皇帝が彼に命じて長孫無忌（ちょうそんむき）（太宗の重臣）の鞍を取って来いと言った。同時に無忌にも内報して、取られないように警戒しろと注意した。その夜、鳥のようなものが無忌の邸内に飛び込んで、二つの鞍を二

つに切って持ち去った。それ逃がすなと追いかけたが、遂に捉え得なかった。

帝はまたかれに命じて丹陽公主（公主＝皇女）の枕を取って来いと言った。それは金をちりばめた函付きの物である。かれは夜半にその寝室へ忍び入って、手をもって睡眠中の公主の顔を撫でた。思わず頭をあげるあいだに、かれは他の枕と掏りかえて来た。公主は夜の明けるまでそれを覚らなかった。

又ある時、彼は吉莫靴をはいて、石瓦の城に駈けあがった。城上の墻には手がかりがないので、かれは足をもって仏殿の柱を踏んで、檐さきに達し、さらに椽

を攀（よ）じて百尺の楼閣に至った。実になんの苦もないのである。太宗帝は不思議に思った。

「こういう男は都の近所に置かない方がよい」

彼は地方官として遠いところへ遷（うつ）された。時の人びとは彼を称して壁龍（へきりゅう）といった。

太宗は又かつて長孫無忌に七宝帯を賜わった。そのあたい千金である。この当時、段師子（だんしし）と呼ばれる大泥坊があって、屋上の椽のあいだから潜り込んで無忌の枕もとに降り立った。

「動くと、命がありませんぞ」

彼は白刃を突き付けて、その枕の函の中から七宝帯

を取り出した。更にその白刃を床に突き立てて、それを力に飛びあがって、ふたたび元の椽のあいだから逃げ去った。

（同上）

登仙奇談

唐の天宝（てんぽう）年中、河南緱子（かなんこうし）県の仙鶴観（せんかくかん）には常に七十余人の道士が住んでいた。いずれも専ら修道を怠らない人びとで、未熟の者はここに入ることが出来なかった。

ここに修業の道士は、毎年九月三日の夜をもって、

一人は登仙（とうせん）することを得るという旧例があった。

夜が明ければ、その姓名をしるして届け出るのである。勿論、誰が登仙し得るか判らないので、毎年その夜になると、すべての道士らはみな戸を閉じず、思い思いに独り歩きをして、天の迎いを待つのであった。

張竭忠（ちょうけっちゅう）がここの県令となった時、その事あるを信じなかった。そこで、九月三日の夜二人の勇者に命じて、武器をたずさえて窺わせると、宵のあいだは何事もなかったが、夜も三更（さんこう）に至る頃、一匹の黒い虎が寺内へ入（い）り来たって、一人の道士をくわえて出た。それと見て二人は矢を射かけたが中（あた）らなかった。しかも虎

は道士を捨てて走り去った。

夜が明けて調べると、昨夜は誰も仙人になった者はなかった。二人はそれを張に報告すると、張は更に府に申し立てて、弓矢の人数をあつめ、仙鶴観に近い太子陵の東にある石穴のなかを猟(あさ)ると、ここに幾匹の虎を獲た。穴の奥には道士の衣冠や金簪のたぐい、人の毛髪や骨のたぐいがたくさんに残っていた。これがすなわち毎年仙人になったという道士の身の果てであった。

その以来、仙鶴観に住む道士も次第に絶えて、今は陵を守る役人らの住居となっている。

（博異記）

蔣武

唐の宝暦（ほうれき）年中、循州河源（じゅんしゅうかげん）に蔣武（しょうぶ）という男があった。骨格たくましく、豪胆剛勇の生まれで、山中の巌窟に独居して、狩猟に日を送っていた。彼は蹶張（けっちょう）を得意とし、熊や虎や豹（ひょう）が、その弦音（つるおと）に応じて斃（たお）れた。蹶張というのは片足で弓を踏ん張って射るのである。その鏃（やじり）をあらためると、皆その獣の心（むね）をつらぬいていた。

ある時、甚だ忙がしそうに門を叩く者があるので、

蔣は扉を隔ててうかがうと、一匹の猩々（しょうじょう）が白い象にまたがっていた。蔣は猩々がよく人の言葉を語ることを知っているので、内から訊（き）いた。

「象と一緒に来たのはどういうわけだ」

「象に危難が逼（せま）って居ります。わたくしに人間の話が出来るというので、わたくしを乗せてお願いに出たのでございます」と、猩々は答えた。

「その危難のわけを言え」と、蔣はまた訊いた。

「この山の南二百余里のところに、天にそびゆる大きい巌穴（いわあな）がございます」と、猩々は言った。「そのなかに長さ数百尺の巴蛇（うわばみ）が棲んで居ります。その眼はいなず

まのごとく、その牙(きば)はつるぎの如くで、そこを通る象の一類はみな呑まれたり噬(か)まれたりします。その難に遭うもの幾百、もはや逃げ隠れるすべもありません。あなたが弓矢を善くするのを存じて居りますので、どうぞ毒矢をもってかれを射殺して、われわれの患(うれ)いを除いて下されば、かならず御恩報じをいたします」

象もまた地にひざまずいて、涙を雨のごとくに流した。

「御承知ならば、矢をたずさえてお乗り下さい」と、猩々はうながした。

蔣は矢に毒を塗って、象の背にまたがった。行けば

果たして巌の下に二つの眼が輝いて、その光りは数百歩を射るのであった。

「あれが蛇の眼です」と、猩々は教えた。

それを見て、蔣も怒った。彼は得意の蹶張をこころみて、ひと矢で蛇の眼を射ると、象は彼を乗せたままで奔（はし）り避けた。やがて巌穴のなかでは雷の吼えるような声がして、大蛇（だいじゃ）は躍り出てのたうち廻ると、数里のあいだの木も草も皆その毒気に焼けるばかりであった。蛇は狂い疲れて、日の暮れる頃に仆（たお）れた。

それから穴のあたりを窺うと、そこには象の骨と牙とが、山のように積まれていた。十頭の象があらわれ

て来て、その長い鼻で紅(あか)い牙一枚ずつを捲いて蔣に献じた。それを見とどけて、猩々も別れて去った。蔣は初めの象に牙を積んで帰ったが、後にその牙を売って大いに資産を作った。

（伝奇）

笛師

唐の天宝の末に、安禄山(あんろくざん)が乱をおこして、潼関(どうかん)の守りも敗れた。都の人びとも四方へ散乱した。梨園(りえん)の弟子(ていし)のうちに笛師(ふえし)があって、これも都を落ちて

終南山(しゅうなんざん)の奥に隠れていた。

そこに古寺があったので、彼はそこに身を忍ばせていると、ある夜、風清く月明らかであるので、彼はやるかたもなき思いを笛に寄せて一曲吹きすさむと、嚠喨(りゅうりょう)の声は山や谷にひびき渡った。たちまちにそこへ怪しい物がはいって来た。かしらは虎で、かたちは人、身には白い着物を被(き)ていた。

笛師はおどろき懼(おそ)れて、階をくだって立ちすくんでいると、その人は言った。

「いい笛の音(ね)だ。もっと吹いてくれ」

よんどころなしに五、六曲を吹きつづけると、その

人はいい心持そうに聴きほれていたが、やがておおいびきで寝てしまった。笛師はそっと抜け出して、そこらの高い樹の上に攀じ登ると、枝や葉が繁っているので、自分の影をかくすに都合がよかった。やがてその人は眼をさまして、笛師の見えないのに落胆したらしく、大きい溜め息をついた。

「早く喰わなかったので、逃がしてしまった」

彼は立って、長くうそぶくと、暫くして十数頭の虎が集まって来て、その前にひざまずいた。

「笛吹きの小僧め、おれの寝ている間に逃げて行った。路を分けて探して来い」と、かれは命令した。

虎の群れはこころ得て立ち去ったが、夜の五更(ごこう)の頃に帰って来て、人のように言った。

「四、五里のところを探し歩きましたが、見付かりませんでした」

その時、月は落ちかかって、斜めに照らす光りが樹の上の人物を映し出した。それを見てかれは笑った。

「貴様は雲かすみと消え失せたかと思ったが、はは、此処(ここ)にいたのか」

かれは虎の群れに指図して、笛師を取らせようとしたが、樹が高いので飛び付くことが出来ない。かれも幾たびか身を跳らせたが、やはり目的を達しなかった。

かれらもとうとう思い切って立ち去ると、やがて夜もあけて往来の人も通りかかったので、笛師は無事に樹から離れた。

（広異記）

担生

昔、ある書生が路で小さい蛇に出逢った。持ち帰って養っていると、数月の後にはだんだんに大きくなった。書生はいつもそれを担（にな）いあるいて、かれを担生（たんせい）と呼んでいたが、蛇はいよいよ長大になって、もう担い

切れなくなったので、これを范（はん）県の東の大きい沼のなかへ放してやった。

それから四十余年の月日は過ぎた。かの蛇は舟をくつがえすような大蛇（だいじゃ）となって、土地の人びとに沼の主（ぬし）と呼ばれるようになった。迂闊に沼に入る者は、かならず彼に呑まれてしまった。一方の書生は年すでに老いて他国にあり、何かの旅であたかもこの沼のほとりを通りかかると、土地の者が彼に注意した。

「この沼には大蛇が棲んでいて人を食いますから、その近所を通らないがよろしゅうございます」

時は冬の最中（さなか）で、気候も甚だ寒かったので、今ごろ

蛇の出る筈はないと、書生は肯かずにその沼へさしかかった。行くこと二十里余、たちまち大蛇があらわれて書生のあとを追って来た。書生はその蛇の形や色を見おぼえていた。

「おまえは担生ではないか」

それを聞くと、蛇はかしらを垂れて、やがてしずかに立ち去った。書生は無事に范県にゆき着くと、県令は蛇を見たかと訊いた。見たと答えると、その蛇に逢いながら無事であったのは怪しいというので、書生はひとまず獄屋につながれた。結局、彼も妖妄の徒であると認められて、死刑におこなわれることになった。

書生は心中大いに憤った。
「担生の奴め。おれは貴様を養ってやったのに、かえっておれを死地におとしいれるとは何たることだ」
蛇はその夜、県城を攻め落して一面の湖（みずうみ）とした。唯その獄屋だけには水が浸（ひた）さなかったので、書生は幸いに死をまぬかれた。
天宝の末年に独孤暹（どっこせん）という者があって、その舅（しゅうと）は范県の県令となっていた。三月三日、家内の者どもと湖水に舟を浮かべていると、子細もなしに舟は俄かに顛覆して、家内大勢がほとんど溺死しそうになった。

（同上）

板橋三娘子

汴(べん)州の西に板橋店(はんきょうてん)というのがあった。店の姐さんは三娘子(さんじょうし)といい、どこから来たのか知らないが、三十歳あまりの独り者で、ほかには身内もなく、奉公人もなかった。家は幾間(いくま)かに作られていて、食い物を売るのが商売であった。

そんな店に似合わず、家は甚だ富裕であるらしく、驢馬(ろば)のたぐいを多く飼っていて、往来の役人や旅びとの車に故障を生じた場合には、それを牽(ひ)く馬匹(ばひつ)を廉(やす)く

売ってやるので、世間でも感心な女だと褒めていた。そんなわけで、旅をする者は多くここに休んだり、泊まったりして、店はすこぶる繁昌した。

唐の元和(げんな)年中、許(きょ)州の趙季和(ちょうきわ)という旅客が都へ行く途中、ここに一宿(いっしゅく)した。趙よりも先に着いた客が六、七人、いずれも榻(とう)に腰をかけていたので、あとから来た彼は一番奥の方の榻に就いた。その隣りは主婦(あるじ)の居間であった。

三娘子は諸客に対する待遇すこぶる厚く、夜ふけになって酒をすすめたので、人びとも喜んで飲んだ。しかし趙は元来酒を飲まないので、余り多くは語らず笑

わず、行儀よく控えていると、夜の二更（午後九時―十一時）ごろに人びとはみな酔い疲れて眠りに就いた。三娘子も居間へかえって、扉を閉じて灯を消した。

諸客はみな熟睡しているが、趙ひとりは眠られないので、幾たびか寝返りをしているうちに、ふと耳に付いたのは主婦の居間で何かごそごそいう音であった。それは生きている物が動くように聞えたので、趙は起きかえって隙間から窺うと、あるじの三娘子は或るうつわを取り出して、それを蠟燭の火に照らし視た。さらに手箱のうちから一具の鋤鍬（すきくわ）と、一頭の木牛（ぼくぎゅう）と、一個の木人（ぼくじん）とを取り出した。牛も人も六、七寸ぐらいの

木彫り細工である。それらを竈（かまど）の前に置いて水をふくんで吹きかけると、木人は木馬を牽き、鋤鍬をもって牀（ゆか）の前の狭い地面を耕し始めた。

三娘子はさらにまた、ひと袋の蕎麦（そば）の種子（たね）を取り出して木人にあたえると、彼はそれを播（ま）いた。すると、それがまた、見るみるうちに生長して花を着け、実を結んだ。木人はそれを刈って践（ふ）んで、たちまちに七、八升の蕎麦粉を製した。彼女はさらに小さい臼（うす）を持ち出すと、木人はそれを搗（つ）いて麺を作った。それが済むと、彼女は木人らを元の箱に収め、麺をもって焼餅（しょうべい）数枚を作った。

暫くして雞（とり）の声がきこえると、諸客は起きた。三娘子はさきに起きて灯をともし、かの焼餅を客にすすめて朝の点心（てんしん）とした。しかし趙はなんだか不安心であるので、何も食わずに早々出発した。彼はいったん表へ出て、また引っ返して戸の隙から窺うと、他の客は焼餅を食い終らないうちに、一度に地を蹴っていないないた。かれらはみな変じて驢馬となったのである。三娘子はその驢馬を駆って家のうしろへ追い込み、かれらの路銀（ろぎん）や荷物をことごとく巻き上げてしまった。

趙はそれを見ておどろいたが、誰にも秘して洩らさなかった。それからひと月あまりの後、彼は都からか

える途中、再びこの板橋店へさしかかったが、彼はここへ着く前に、あらかじめ蕎麦粉の焼餅を作らせた。その大きさは前に見たと同様である。そこで、なにげなく店に着くと、三娘子は相変らず彼を歓待した。

その晩は他に相客がなかったので、主婦はいよいよ彼を丁寧に取扱った。夜がふけてから何か御用はないかとたずねたので、趙は言った。

「あしたの朝出発のときに、点心（てんしん）を頼みます……」

「はい、はい。間違いなく……。どうぞごゆるりとおやすみください」

こう言って、彼女は去った。

夜なかに趙はそっと窺うと、彼女は先夜と同じことを繰り返していた。夜があけると、彼女は果物と、焼餅数枚を皿に盛って持ち出した。それから何かを取りに行った隙をみて、趙は自分の用意して来た焼餅一枚を取り出して、皿にある焼餅一枚と掏り換えて置いた。そうして、三娘子を油断させるために、自分の焼餅を食って見せたのである。

いざ出発というときに、彼は三娘子に言った。

「実はわたしも焼餅を持っています。一つたべて見ませんか」

取り出したのはさきに掏りかえて置いた三娘子の餅

である。

彼女は礼をいって口に入れると、忽ちにいなないて驢馬に変じた。それはなかなか壮健な馬であるので、趙はそれに乗って出た。ついでにかの木人と木牛も取って来たが、その術を知らないので、それを用いることが出来なかった。

趙はその驢馬に乗って四方を遍歴したが、かつて一度もあやまちなく、馬は一日に百里を歩(あゆ)んだ。それから四年の後、彼は関に入って、華岳廟(かがくびょう)の東五、六里のところへ来ると、路ばたに一人の老人が立っていて、それを見ると手を拍(う)って笑った。

「板橋の三娘子、こんな姿になったか」

老人はさらに趙にむかって言った。

「かれにも罪はありますが、あなたに逢っては堪まらない。あまり可哀そうですから、もう赦(ゆる)してやってください」

彼は両手で驢馬の口と鼻のあたりを開くと、三娘子はたちまち元のすがたで跳り出た。彼女は老人を拝し終って、ゆくえも知れずに走り去った。

（幻異志）

底本：「中国怪奇小説集」光文社
1994（平成6）年4月20日第1刷発行
※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。
入力：tatsuki
校正：小林繁雄
2003年7月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。